

---

# 分身

エンデバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

分身

### 【Nコード】

N7592C

### 【作者名】

エンデバー

### 【あらすじ】

俺の身の回りで不可解な出来事が起こっていく。覚えのない彼女からの告白。覚えのない強盗殺人事件から、容疑者へ。そして、もう一人の『俺』の存在。様々な謎ともう一人の俺の存在とは何なのか？

暗い、暗い闇の中に俺は立っている。四方を見回しても、暗くてなにもわからない。手を振り回してみる。しかし、周りには触れるものさえなにもない。一体ここはどこなのだろうか？

突然、ぱっと視界が明るくなった。暗闇の世界から、一瞬にして光の世界に変わった。俺は反射的に、手で目を覆った。が、一瞬遅く、目が眩んでしまった。

徐々に慣れてくると、光の中に、人のシルエットが浮かび上がっていることに気付いた。それは、俺の真ん前に立っていて、手を伸ばせば、触れることができるだろう。だが、俺は躊躇い、手を伸ばそうとしなかった。

「おつ、お前誰だよ？」

俺は黒い影に向かつて、おそろおそろ声をかけた。しかし、黒い影は俺の問い掛けになにも反応を示さなかった。

「おい、なにかいえよ」

「俺はお前。お前は俺だ」

黒い影はやつと口を開いた。だが、俺にはいったことの意味がわからなかった。

「どういうことだ？」

「そのうちわかるだろう」

「そのうちって……ここはどこなんだ？」

「お前自信の中だよ」

黒い影はそういい俺に背を向け歩き出した。

「待てよ。意味わかんないって」

俺は黒い影を呼び止めたが、影は俺を無視し光に向かつて歩き続けていた。どうやら、立ち止まるつもりはなさそうだ。

俺の足は、自然と黒い影を追っていた。だが、距離が縮まる気配は一向になかった。むしろ、徐々に遠ざかっているようだ。黒い影

との距離はどんどん開いていく一方だ。俺は走って追いかけているのに、何故追いつかないのだろう。

しばらく追いかけていると、黒い影は光の中に吸い込まれるように消えていった。それと同時に、俺の周りには暗闇が戻った。先ほどと同じ、ただ暗闇が俺を包んでいるだけだ。俺は、一人取り残されたような孤独感を覚えた。

どれくらい取り残されていただろうか、俺は意識が遠のいていく感じがした。その瞬間、この世界から出られる、という安堵が胸の中を支配した。

不快な電子音が響いていた。目覚まし時計を止めると、まだ眠気の残る目を擦り、重い瞼を開いた。あれは、夢だったのだろうか。黒い影が俺にいったこと。まるで意味がわからない。

頬を軽く叩きベッドから起き上がると、勢いよくカーテンを開いた。朝の日差しが、部屋に注ぎ込まれる。その後、机の上に出しっ放しにされた数学のノートと問題集を見て、俺はため息を漏らした。それは、今日提出しなければならぬ課題なのだ。昨夜取り掛かっていたのだが、眠気に負け投げ出してしまった。たとえ投げ出さなかったとしても、数学嫌いな俺は、おそらく課題をこなすことはできなかつただろう。

教室に入ると、俺は坂倉麻衣のところへ向かった。彼女とは幼なじみで、小学生の頃から仲がよかった。小学生の頃は、男とよく外で遊んでいたためか、お転婆娘といわれていた。彼女はソフトボール部に所属しているため、黒光りした肌をしている。ショートヘアの髪の毛は茶色がかっている。

「頼む、数学のノート貸してくれ。提出するまでには返すから」  
「また」

坂倉は呆れた顔をした。それも仕方ないことだろう。今までに俺は、彼女に何度か宿題のノートを写させてもらっていたのだから。

「悪いな。どうも数学だけは苦手なんだよ」

「はいはい、わかつたわよ」

坂倉は鞆から数学のノートを取り出すと、それを俺に差し出した。  
「サンキュー。必ず借りは返すから」

俺はそれを受け取りながらいった。

「ちよつと待って」

坂倉に背を向け歩き出したところを呼び止められ、俺は首を捻り彼女を見た。坂倉は、なんだか照れているような顔をしていた。

「んっ？ どうしたんだ？」

いおうかどうか迷っているようで、少しの間、彼女は口を開かなかった。

「ごめん、やっぱりまた今度でいいや」

「なんだよ。気になるじゃん」

「いいから。気にしないで」

坂倉は微笑んだ。

坂倉のおかげで、なんとか宿題を提出することができた。彼女の成績はクラスの中でもトップクラスだ。だから、解答に間違いは少ないだろう。数学が苦手な俺にとっては、宿題などの提出物で、点数を稼ぐ必要があった。宿題が出される度、毎度、彼女に写させてもらっているため、俺の数学の成績も平均を保っているのだ。

「あんだ、今日ちゃんと学校に行ってたわよね。途中学校を抜けたりしなかった？」

玄関で靴を脱いでいると、母が怪訝な顔をして尋ねてきた。

「ちゃんとした。それに、抜け出してもないよ」

「そう」

母は納得のいかなさそうな顔をしていた。そして、続けて独り言でも呟くようにいった。

「おかしいわね。昼過ぎに見たのは一体なんだったのかしら。間違はなく大輝だと思ったんだけど」

「どうかしたの？」

「昼過ぎに、ゲームセンターで大輝を見かけたのよ。しかも、制服じゃなくて私服だった」

おそらく人違いなのだろう。昼過ぎといえば、俺は教室で昼食を食べていた最中だ。無論、学校を抜け出したりもしていない。その後、五時限目に提出しなければならぬ数学の宿題を写していたのだ。

「きっと人違いでしょ。俺は学校を抜け出したりしてないんだから」「そうなのかな」

依然として母の顔はぱっとしない。なにかもやもやとしたものでも残しているかのようだ。

「学校を抜け出して、ゲーセンに行くような不良じゃないって」

「それもそうね。きっと私の見間違いね」

そういつて、母は台所に戻って行った。

ズボンのポケットに手をつ突っ込むと、財布が無くなっていることに気付いた。昨夜、確かにポケットに入れておいたはずだった。どこかに落としてしまったのだろうか。だが、いくら考えても、思い当たる節はなかった。財布には大してお金は入っていなかったし、

高い財布でもなかったのでもた買えば済むことだ。

二階の自室に行き、クローゼットを開けると、今度はお気に入り  
のワンピース入りのティーマット着とジーンズが一着無くなっ  
ていた。どうして、無くなってしまっているのか、俺にはさっぱり  
わからなかった。仕方なく、他のティーマットを着て、ジーンズを  
穿くことにした。

その後も、俺の周りではなにかが忽然と消えたりすることが続い  
ていた。消えた物はそこら中を探しても、一つも見つからなかった。  
俺にはそれらの原因がさっぱりわからずにいた。ただ一つわかって  
いることは、全て日中に起こっているということだけだ。

俺は暗い闇の中に立っていた。あの時と同じだ。そして、ぱっと  
視界が明るくなった。黒い人の形をしたシルエットの影が、俺の目  
の前に立っている。

「一体お前は誰なんだよ？ どうして俺の前に現れる？」

「前にもいったことだ。二度も答える必要はないだろう」

黒い影は、白い歯を覗かせ、笑った。その瞬間、俺はぞっと、鳥  
肌が立つのを覚えた。

「だから、『俺はお前。お前は俺』ってどういうことなんだよ。意  
味わからないって」

「明日にでもわかるだろう」

黒い影は素晴らしい残し、光の中へと消えていった。

うるさい目覚まし時計の音で、俺は目を覚ました。背中はずつし  
よりと、汗でべたべたとなっていた。あの黒い影はなにがしたい  
のだろうか。今日にわかるかといっていたが、果たして本当なのだろ  
うか。

「大輝こっちにこいよ」

教室に入るなり、荻窪隼人に声をかけられた。俺は、鞆を机に置き、彼のところへ向かった。

「昨日、坂倉とどこ行ってたんだ？」

隼人はにやにやした顔つきで訊いてきた。

「どこって……どこにも行ってないけど」

「とぼけんなって。お前と坂倉が、手繋いで歩いてるところを見たんだからさ」

「はあ？ 人違いだろ。俺は昨日坂倉と会ってないし」

昨日はずっと家にいたのだ。本屋へ買い物に行ったときくらいしか、外出はしていなかった。

「そんなはずはないぜ。お前に声かけたんだからさ」

依然として、彼の表情は緩んでいる。なにかを期待しているような顔だ。

「俺はなんて答えたんだ」

「彼女とデート中だって」

隼人は俺のほうに顔を近づけると、周りの者に聞こえないように、声のトーンを落としていった。

「えっ！ 本当……なのか？」

俺は確認するように、隼人に尋ねた。隼人は首を縦に振った。

信じられなかった。坂倉に告白されたことも、俺が彼女に告白したことも記憶にない。それに、昨日隼人が見たという俺は一体誰なのだろうか？

「で、昨日はどこ行ってたんだよ」

隼人はしつこく訊いてくる。

「だから、どこにも行ってないって」

俺がいい終わると同時にチャイムが鳴った。タイミングのよい、



救いのチャイムだ。それを機に、俺は自分の席に戻った。頭の中は混乱していて、どうということなのか、さっぱりわからない。

ぼうつと、黒板を見つめていると、突然脇腹に激痛が走った。誰かに蹴られたような、強い衝撃と痛みだった。そして、その衝撃と激痛は、二度三度と脇腹に感じた。その後に、左頬に強烈な衝撃を受けた。唇が切れたようで、口の中に血の味が広がった。

ずきずきと痛む脇腹を押さえ、机に顔を埋めた。突然のことに、誰に殴られたのかさえもわからなかった。いや、誰も俺を殴っていないのだろう。それを裏付けるように、教室の中は何事もなかったかのように、皆が黒板に目を向け板書していた。ブレザーを脱ぎ、シャツをめくつてみると、激痛の走った脇腹に青痣ができていた。

その夜、坂倉からメールが送られてきていることに気付いた。そのメールを見て、俺は驚いた。

メールの内容は、昨日彼女と遊園地に行ったことについてだった。俺には身に覚えのないことだ。どうやら、隼人が俺を見たというのも嘘ではないかもしれない。そうすると、もう一人俺が存在するということになる。だが、そんなことは有り得ないことだろう。

俺はメールを返信せず、翌日、坂倉と直接話そうと決めた。それに、結局、あの影がいったことはわからず仕舞いだった。

俺が屋上に行くと、フェンスの金網をつかみどこか遠くを見ている坂倉がいた。昼休みに、話があるといって、放課後屋上に来るよう呼び出しておいただ。

「なに見てんの？」

俺が坂倉の背中に向かって声をかけると、彼女はゆっくり振り向いた。

「こっち来て」

坂倉に呼ばれ、彼女のところへと歩み寄った。

「あの公園だよ」

坂倉は指さしながらいった。

「懐かしいな。小学生の頃、学校帰りによく遊んだんだよな」

「そうそう。覚えてる？　大輝が鉄棒から落ちたとき、私が泣き叫ぶあんたを引つ張って帰ったこととか」

「そんなこともあったっかな」

俺は苦笑した。

坂倉は笑いながら、俺のほうに顔を向けた。一瞬、彼女の笑顔にどきりとした。

「それで、話ってなんなの」

「昨日のメールのことなんだ」

「メール？」

「遊園地に行ったってあつたけど、俺全然覚えてないんだ。だから、そのときの話が聞きたくて」

「うそ！　本当なの？」

坂倉は信じられないというような顔をした。俺は頷いて答えた。

「記憶障害でもあるの？」

「そういうわけじゃないと思う。坂倉といたときの記憶がないんだ」  
坂倉は小首をかしげ、なにか考え事でもしているかのような表情をした。

「ねえ、もしかして大輝って二重人格とかそういうんじゃないよね？」

坂倉の探るような質問に、俺はどきりとした。最近、身に覚えのないことが起こっていたこともあり、俺自身、二重人格であるのかもしれないと思っていたのだ。

「どうしてそう思うんだ？」

「私と遊園地に行ったとき、大輝は私のこと坂倉なんて呼んでなかった。麻衣って名前で呼んでくれてたから」

「そうなのか？」

坂倉は頷いた。俺は彼女に対して、名前で呼んだことは一度もなかった。

「遊園地に行った日、隼人に会ったってのも本当なのか？」

「うん、本当だよ。私嬉しかった。大輝が誤魔化さず、本当のこと

いってくれて」

本当のこととは、俺と坂倉が付き合っているということなのだろう。俺にはどういう経緯でそうなったのかはわからないが。

「俺たち付き合ってるのか？」

俺の言葉に、坂倉はまたしても驚きの表情を浮かべた。

「そんな……私が告白したことも記憶にないの？」

「ごめん。ないんだ」

「ひどい……」

坂倉の表情は悲しそうな顔に変わっていた。彼女の顔を見て、聞いてはいけないことだったのかもしれない、と俺は後悔した。彼女の悲しそうな表情に俺の胸は痛んだ。

「それじゃ、大輝が付き合ってくれるっていったのはなんなのよ」

俺は言葉を失った。頭の中が混乱していて、どう答えればいいのかわからなかった。

「私のことどう思ってるの？」

坂倉は真っ直ぐ俺を見つめていった。

「それは……」

思わず彼女から視線を逸らしい淀んだ。あと一言、言葉が出てこない。俺は、自分の中で答えを出せないでいた。

「もういい……」

坂倉は俺に背を向けると、走って屋上を後にした。

俺は坂倉のことが嫌いではない。かといって、好きかと聞かれれば、素直にはいといえるかどうかわからない。ただの幼なじみとして仲がよかっただけで、彼女を恋愛対象として見てこなかったからだ。複雑な気持ちで、やりきれない思いだ。

俺の周りで一体何が起きているのだろうか？ 夢に見る黒い影に、俺の周りで起こっている不可解な出来事。いくら頭の中を整理しても、まるで理解できない。もう一人俺が存在していると考えるのが妥当のように思えるが、果たしてそんなことがあるのだろうか。一人取り残された屋上で、俺はフェンスの金網をつかみ頂垂れた。

その瞬間、目を疑った。

俺の影がなかったのだ。空は夕空に変わりつつあるが、陽は出ている。周りの建物や、グラウンドを歩く生徒たちにはちゃんと影がある。それなのに、俺にだけ影が存在していない。身体には特に変わった様子はないが、影がないとはどういうことなのだろう。これも例の不可解な出来事に関わってることなのだろうか？

家に帰ると、俺はベッドに寝転がった。身体が鉛のように重く、ひどく疲れているのがわかる。目を閉じてしまえば眠ってしまいそうだ。しみで黒ずんだ天井を見つめ、しばらくして目を閉じた。

頭の中に、様々な不可解な出来事が蘇ってきた。唯一共通していることは、全ての不可解な出来事が日中に起こっているということくらいだ。それだけではさっぱりわからない。

それに、坂倉のこと。幼なじみとしての彼女ではなく、男女の関係として向き合う必要がある。俺が答えを出さなくてはいけない。彼女に対しての俺の想いはどうなのだろう？

しばらく考え込んでから、俺はベッドから飛び起きた。カバンから携帯電話を取り出し、電話帳を開け坂倉に電話をかけた。呼び出し音が四回鳴ったところで、彼女は電話に出た。

「なんなの？」

坂倉は突っかかるような、不機嫌そうな声でいった。

「えっと、ごめんな。その……遊園地に行ったことや、坂倉に告白されたことが記憶になくてさ」

「もういいよ。あの後考えてたんだけど、記憶がなくなってるのは仕方ないことだもんね」

「それでさ、今度の日曜日空いてないかな？」

「日曜日？ どうして？」

「ほら、俺たち付き合ってたんだろ。麻衣の予定が空いてるなら、どこかに出かけよう。それに、前に借りた数学の宿題の埋め合わせもしたいからさ」

坂倉を名前で呼ぶのは初めてだったが、なんだか違和感を覚え気

恥ずかしくなった。電話越しにくすくすと坂倉の笑い声が聞こえてきた。

「なっ、なに笑ってんだよ」

「ごめん、ごめん。大輝ってさ、随分前のこと覚えてるんだね。私すっかり忘れてた」

「当たり前だろ。麻衣には課題出される度世話になってるんだからな。そういうわけで、日曜日頼んだぜ」

「わかった。空けとく」

坂倉は明るい声でいった。彼女の機嫌も直ったようだ。

電話を終えると、俺はぱたりとベッドに倒れこんだ。

「麻衣……か」

黒ずんだ天井を見つめ、そっと彼女の名前を呟いてみた。そして、目を閉じると、俺の意識はすっと遠ざかっていった。

小さな公園には誰もいなかった。俺は公園の時計台の下まで行くと、時計を見上げた。時計は午前九時四十五分をさしていた。彼女との待ち合わせの時間まで、後十五分ある。近くのベンチに腰を掛け、地面に視線を落とした。俺の影は依然として戻らない。どうして消えてしまったのか、未だに答えも見つからない。

ふっとため息を漏らすと、青い空に目を向け、ぼうつと雲の流れを目で追った。雲の流れと共に、雲の影も移動する。

「なにぼうつとしてんの」

目の前に突然大きな影が現れ、俺は我に返った。

白いワンピースを着た麻衣が立っていた。彼女の姿に俺は目を奪われた。化粧を施した彼女の顔は、学校で見る彼女の顔とは程遠いように思えた。普段一重瞼の彼女も、今日は二重瞼になっていた。それに、いつも掛けている黒の眼鏡をかけていない。おそらくコンタクトレンズをしているのだろう。凜とした表情と、きりつとした二重瞼の彼女に、どこか清々しさを感じた。

「で、今日はどこ行くの？」

麻衣は俺の隣に座りながら訊いた。

「遊園地に行こう。俺の記憶がなかった遊園地へ。無くしてしまっただ記憶を取り戻したいんだ」

「無理しなくていいのに。取り戻さなくなっただって、また新しい思い出を作っていけばいいんだからさ」

「それじゃ駄目なんだ」

俺は首を横に振りながらいった。

「俺の問題の解決にならない」

「大輝の問題？」

麻衣は怪訝な顔で俺を見つめた。俺は彼女に、これまでの不可解な出来事を全て話した。

このまま記憶を取り戻そうとしなければ、なにも解決しないだろう。俺の周りで起こっている不可解な出来事は、これに関連することとに違いないはずだ。しかし、物理的に考えれば有り得ないことだと、頭の中ではわかつている。同じ時間軸の中で、二人の自分が別々の行動をするなんて考えられない。幽体離脱やドッペルゲンガーなどの、非科学的な考え方をしたくなかった。

「そっか。それじゃ、大輝の記憶が戻れば、全ての謎が解けるかもしれないんだね」

「そうだな」

「それじゃ、行こっか」

麻衣は俺の手を握り、立ち上がった。

俺たちが行ったらしい遊園地は、最寄り駅から三駅離れたところにあった。そこからバスに乗り、十五分ほどで着いた。

その遊園地は雑誌にも取り上げられるほど有名な場所で、日曜日ともあり人で溢れていた。俺は麻衣と腕を組み、遊園地の中へと足を踏み入れた。

俺の記憶を取り戻すためといって、麻衣は以前俺と来た時と同じアトラクションを選択していった。しかし、俺には全て初めて目にするものばかりで、記憶の戻る気配は一向になかった。

「どう？ 記憶戻りそう？」

二人で少し遅い昼食をとっていると、不意に麻衣に訊かれた。俺は力なく首を横に振って答えた。

「そう」

麻衣は沈んだ顔をした。

「ごめん。やっぱそう簡単には記憶なんて取り戻せないのかな」

「焦ることないよ。きっと取り戻せるって」

「そうかな」

俺は苦笑した。麻衣はそういうものの、内心取り戻せないのではないかと思っていた。

昼食後も、いくつかのアトラクションを回ったが、結局俺はなに

も思い出せなかった。いや、そもそも記憶を無くしてしまったこと自体が、間違いなのかもしれない。結局、なにもわからないまま遊園地を後にすることとなった。



待ち合わせ場所の小さな公園に戻ってきた俺たちは、ブランコに腰掛けた。午前中とは違い、公園には数人の親子がいた。砂場で砂山を作っている子供たちに、少し離れたところからベンチに座って子供たちを見守る母親の姿。夕方の公園によくある光景だ。

「大輝って、ジェットコースター苦手だったよね？」

麻衣は確かめるように訊いた。

「ああ、苦手だ」

俺は高いところが苦手なのだ。それに、ジェットコースターともなると、スピードが加わるのだから尚更。しかし、今日は仕方なくそれにも乗ったのだった。

「今日の大輝、前とは別人のような気がした」

「別人って？」

「前行った時、ジェットコースターに乗ろうって誘ってくれたのは大輝だったの」

「俺から誘った……」

ジェットコースターが苦手な俺が、そんなことをするはずがない。だけど、今日は違った。ジェットコースターに乗った時、大輝はずっと怯えてたし」

「それじゃ、麻衣と行った俺は誰なんだ」

「わからない」

麻衣は首を振った。彼女の頭の中も混乱しているのだろう。

「確かに大輝だったわ。だけど、今日の大輝とは違った。やっぱり二重人格とかじゃないの？」

「そんなはずはない」

俺はつい怒鳴ってしまった。

「二重人格とか多重人格って、本人には自覚がないものよ。それにその時は記憶がないんだし」

仮に俺が二重人格としても、ほかの不可解な出来事は解決できない。突然身体に走った痛みや、忽然と物がなくなっていたりしたことの説明がつかないのだ。

しばらくすると、子供たちは帰っていった。公園に残されたのは俺たち二人だけだ。空は赤く染まりつつある。俺は立ち上がり麻衣の前に立つと、彼女の手を引っ張って、公園の端にある大きな桜の木の下まで行った

「これ覚えてるか？」

桜の木の幹に、二つの横線が刻み込まれている。二つの線には、三センチくらいの隙間がある。

「私たちが小学生のころに測った身長だよ。確か……小学四年生の頃だったかな」

「そう」

上に刻まれているのが麻衣のもので、下が俺のものだ。

「あのときは、大輝ちっちゃかったもんね」

「今は違う。身長測ろうぜ」

俺は桜の木の幹に背をつけ、背筋をぴんと伸ばした。麻衣は少し尖った石で、俺の頭上に一本横線を刻み込んだ。次に、麻衣が桜の木の幹に背をつけ、俺が彼女の頭上に横線を刻み込んだ。

「少し目を瞑ってくれないかな」

麻衣はこくりと頷くと、目を瞑った。俺は彼女の唇にそつと唇を重ね合わせた。柔らかな感触が伝わってきた。彼女は目を開けると、驚いた表情で俺を見つめた。

「これが俺の答えだ。俺、麻衣のこと好きだよ」

一言出てこなかった言葉。俺が出した答え。今日、俺から告白しようと思ったことだった。麻衣からすると俺に告白して、俺から告白されたことになるのだろう。

「ありがとう」

麻衣は今にも泣き出しそうな顔をしている。俺は彼女をぎゅっと抱きしめた。

「ごめんな、俺が記憶ないばかりに悲しい思いさせて」

「ううん、大輝の気持ち聞けたから、もうそれでいい」

俺は桜の木に彫られた二つの横線に目を向けた。二つの線は十センチくらいの差がある。その二つの線は、俺と彼女の新たなスターラインが刻み込まれた証でもある。

家に着くと同時に、携帯電話が鳴った。電話は非通知となっていた。出ようかどうか迷ったが、俺はそれに出ることにした。

「鈍いやつだな。まだ気づかないのか」

電話越しに聞こえてきたのは、俺の声だった。

「お前、誰だ」

俺は電話に向かって叫んだ。すると、電話の向こうから不気味な笑い声が漏れてきた。

「俺の正体も間も無くわかるはずだ。今頃そっちにお迎えが向かってるはずだぜ」

「迎えてなんのことだ？」

「それもすぐにわかることさ」

俺の声の主はそういうと電話を切った。

二階の部屋に行き、椅子に座ると唇にそつと手を当ててみた。まだ心臓の鼓動は高鳴っている。先ほどの出来事を思い出すだけで、顔が火照ってしまう。

少し前のことを反芻していると、玄関のチャイムが鳴った。家には俺以外誰もいないので、仕方なく俺が出た。

玄関のドアを開けると、体格のいい男が二人並んで立っていた。初めて見る顔だった。一人は髭面で四十代くらいの男だ。もう一人は、かなり若い。おそらく二十代前半だろう。二人いるのだから、セールスなどの類ではなさそうだ。

「君が赤羽大輝くんかな」

髭面の男が尋ねてきた。

「はい、そうですけど。あなたたちは」

「私たちはこういう者だ」

髭面の男は懷から警察手帳を取り出し伊勢崎勝夫と名乗った。それを見て、俺はどきりとした。この近くでなにか事件でもあったの

だろうか。

「警察の方がなんの用ですか」

俺が訊くと、二人の刑事は顔を見合わせ、ため息をついた。

「誤魔化そうとしても無理だ。証拠は出揃っているんだからな。君を強盗殺人の容疑で逮捕する」

伊勢崎は、俺の腕をつかむと手錠を掛けようとした。俺はあわてて彼の手を振り払った。

「ちょっと待ってくださいよ。いきなりなんなんですか。俺が強盗殺人犯なんて、そんなはずあるわけないじゃないですか」

「証拠は出揃っているといっただろ。いくら足掻いても無駄だ。話は署でじっくり聞かせてもらおう」

一歩後退したとき、若い男に腕をつかまれてしまった。俺はそのまま床に倒され、その後、若い男が俺の背中に乗りかかり俺は身動きが取れなくなった。伊勢崎は、身動きの取れない俺に手錠を掛けた。

警察署に着くなり、俺は取調べ室に連れて行かれた。狭い空間で、警察と向かい合わなければならぬ。ここが、何人もの犯罪者が罪を認めた場所なのだろう。今なら、彼らの気持ちが少しはわかる。

間も無くして、伊勢崎刑事がビデオテープを持って入ってきた。俺は伊勢崎をきつと睨みつけた。警察の暴挙に腹が立っていた。

「そんな怖い顔で睨むなよ」

伊勢崎は笑顔だったが、威圧的なものを感じた。この部屋に入られて、隙を見せたら負けだ。

「俺はなにをやっている。俺がやったって証拠がどこにあるんだよ」「これを見ればわかるさ」

伊勢崎は、ビデオテープをビデオデッキに入れ再生ボタンを押した。テレビに映し出されたのは、銀行だった。俺には、覚えのない銀行だ。時刻は今日の午後二時となっていた。少ししてから、俺は目を疑った。銃で銀行員を脅迫している映像が映し出されたのだ。脅迫しているのは紛れも無く俺だった。マスクや帽子などは被って

おらず、一切変装は行っていなかった。

テレビの中の俺は、銀行員が出した札束をカバンに詰め込んでいった。銀行員は怯えた様子で俺のいうことに従っている。現金を奪うと、俺は銀行員の頭を撃ちぬいた。そして、二人三人と手当たり次第人を撃っていった。銀行内は血の海となり、銀行員を含め四人の人が殺された。

そのビデオに俺は違和感を覚えた。なにかが足りないように思えたのだ。しかし、それがなんなのかは、わからなかった。

「この映像を見て、まだ言い逃れをするつもりか」

ビデオを停止させてから、伊勢崎はいった。

「俺には身に覚えの無いことだ。だいたい今日の二時なら、俺にはアリバイがある」

「ほう、ならその話を聞かせてもらおうか」

伊勢崎は俺の向かいの席に座った。

午後二時といえば、麻衣と遊園地に行っていた時間帯だ。俺はそのことを伊勢崎に話した。

「それなら、この映像はどう説明する？ もう一人お前が存在するとしてもいいのか」

「それは……」

不意に先ほどの電話のことを思い出した。もう一人の俺の存在信じられないことだが、そう考えるべきなのかもしれない。だとすると、俺は記憶など無くしていなかったことになる。あの電話の主がいつていたお迎えとは、警察のことだったのか？

「そう考えるしかないと思います。もう一人俺が存在するのでしょうか」

伊勢崎はぷつと吹き出し、大笑いした。

「ばかばかしい。そんなことあるはずがない」

笑いを止めると、伊勢崎は俺の顔を見ながら、

「君、ここまでおかしくなったのか？」

と人差し指で顚& a m p ; # 3 9 0 2 0 ; をとんとんと二回叩き

ながら、馬鹿にするようにいった。

俺はバンと机を叩き、刑事を睨みつけた。

「俺にはちゃんとアリバイがあるんだ。信じられないことだけど、そう考えるのが妥当だ」

「お前が撃った銃は、近くの交番の署員を殺して盗んだものだ。それも覚えがないのか？」

俺は首を縦に振った。今日一日は麻衣と時間を過ごしたのだから、それ以外のことをわかるはずがない。もっとも俺は罪など犯していないが。

「本当に君はやってないんだな？」

伊勢崎は真剣な眼差しを俺に向け訊いた。俺は刑事をしつかり見据え、やっていない、と答えた。

「わかった」

「えっ！ 俺のいうことを信じてくれるのか」

伊勢崎は煙草を取り出すと、吸ってもいいか、と尋ねてきた。俺は頷いた。彼は煙草を一本くわえると、火を点けふーっと白い煙を吐き出した。

「もう一度よく検討してみる必要があるということだ。この事件にはわからないことがまだある」

「わからないこと？」

俺は繰り返した。

「そう。銀行強盗をするなら、なぜ変装をしなかったかだ。普通銀行強盗などをする場合、捕まることを恐れて、なにかしら変装をするだろう。しかし、この映像を見るとなにも変装はしていない。しかも落ち着いた様子で、余裕があるようにも思える。犯人は君の顔に変装しているのかもしれないが、ここまで精密に他人の顔を装うことは不可能だ。それに犯人が銀行を出てから、目撃されたという情報がないんだ。この銀行は国道沿いであって、周辺も人通りが多い。しかし、聞き込みをしても目撃情報が一切ない。不思議とは思わないか」

「確かに変だ。それだけわからないことがあるのに、なぜ俺を逮捕したんだ？」

「仕方なかったんだ。上層部の連中が逮捕状を出したからな。連中はこの映像を見ただけで君を逮捕することを決定した。まあ、俺も賛成した人間だがな。この映像を見る限りじゃ仕方の無いことさ」

伊勢崎はビデオテープを持ちながらいった。確かにそのテープを見る限りでは仕方の無いことだ。

「さて話は終わりだ」

伊勢崎は灰皿で短くなった煙草を揉み消すと立ち上がった。

「俺はもう帰れるのか」

立ち上がった伊勢崎を見て、俺はいった。

「それはできない。今は君が容疑者になっているんだ。君のアリバイが明白になるまで自由はないだろう。えーっと、麻衣ちゃんといったかな。彼女はちゃんと君のアリバイを証言できるんだろ」

俺は頷いた。

「それなら釈放もすぐだろう」

伊勢崎はにっと、黄ばんだ歯を覗かせた。しかし、次の瞬間、彼の表情は変わった。

「いや……」

といって、伊勢崎は首を傾げた。

「君のアリバイが証明されても釈放はないかもしれんな」

「どうして？」

間髪を容れず俺はいった。

「アリバイが証明されたとしても最大の謎が残っているだろ」

「最大の謎？」

俺は小首を傾げてみせた。伊勢崎は俺を指さしながら

「もう一人の君の存在だよ」

といった。

「それが解けない限り、釈放はないかもしれん」

なるほどと思い、俺はがっくりと肩を落とした。しばらく刑務所



に閉じ込められそうだ。まったく無理無法なことだ。冤罪扱いに他ならない。

「あんたはもう俺を疑っていないのか？」

「目を見ればわかる。君の目にウソはなかった。だから、俺は君の証言を信じることにするよ」

髭の生えた顎に手を当て伊勢崎はいった。

「これで君が犯人だと、俺の責任問題になるけどな」

伊勢崎は髪を薄い頭を掻きながら、取調べ室を出て行った。

伊勢崎刑事のいう通り、俺は留置場に入れられることになった。

留置場に入れられると同時に、もしかするともうここから出ることはできないのかもしれない、という不安が一気に胸の中に広がった。もう一人の俺の存在なんて、誰も信じることはないだろうし、科学的に立証することも不可能だ。俺自信でさえも、もう一人の自分の存在など信じたくない。

信じたくはないが、ずっと頭に引つかかっている言葉があった。黒い影がいった『お前は俺。俺はお前』という言葉だ。その存在を認めれば、この言葉にも納得できる。

伊勢崎によると、麻衣の証言は聞き入れられなかったということだった。やはり、同じ時間軸の中で、同一人物が別々の行動をとっているということは考えられないらしい。警察は麻衣の証言よりも、物的証拠である銀行の映像のほうをとったのだ。それが、正しいことなのだろう。証言よりも、物的証拠のほうが確かなのだから。

留置場に入れられ、一週間、二週間と月日が経っていった。無情にも時間だけが悪戯に過ぎていくだけで、事件に進展はないようだ。いや、捜査はすでに終わっているのかもしれない。同じ顔の犯人は捕まっているのだから、捜査する必要もないのだろう。

ある日、留置場にいくつもの足音が重なって聞こえてきた。ひんやりとした空間に、地下道を歩いているように響く靴の音。その足音は、俺の留置されているところで止まった。俺が顔をあげると、伊勢崎と若い男の刑事が立っていた。

「朗報だ。君は釈放されることになった」

伊勢崎がいった。

「釈放……真犯人が捕まったんですか？」

自分でも情けないくらい、力のない声だった。留置されてだいぶと疲れきっているようだ。

「いや、犯人が捕まったわけではない」

「それじゃ、なぜ？」

「新たな事件が起きたんだよ。犯人の顔はちゃんと防犯カメラに収められている」

それを聞いて、俺はまさかと思った。事件が起きて、俺が釈放されるとなると答えは一つしかない。

「事件を起こしたのは、俺だったんですか？」

「そうだ。君が留置されている間に起こった事件なのだから、我々警察も混乱している。君の無実は明白となったが、事件は洗い直した。全く、面倒な事件だ」

「今度の事件はどんなものだったんです？」

「コンビニ強盗だ。銀行強盗のときと同じように、店員は頭を撃ちぬかれ殺された。それに客が一人殺されている。捜査により、銃は以前に使用したものと同じということがわかつている。これで犯人の持つ銃は弾丸がなくなった」

いいながら、伊勢崎は留置場の鍵を外した。

銀行強盗で四人射殺し、コンビニ強盗で二人射殺した犯人の持っていた銃には六発弾丸が装填されていたことになる。さらに、警察を一人殺しているから犯人は七人も人を殺しているということになる。

「犯人の足取りはつかめているんですか？」

伊勢崎は首を振った。

「銀行強盗のときと同じだ。目撃情報などは一切ない」

「すみませんが、その映像を見せていただくことはできますか？」

俺は二人の刑事の顔を交互に見た。

「別にかまわんが、なにか引かかることでもあるのか？」

伊勢崎がいった。

「引かかることというよりは、ちょっと気になることがあるんです」

コンビニのビデオを見て、俺の考え通りなら、銀行のビデオを見

たときに感じた違和感が拭い去られることになる。

伊勢崎と若い男に連れられ、俺は取調室へと入った。伊勢崎は部屋を出て行くと、しばらくしてから、ビデオテープを持って入ってきた。

「これが問題のビデオテープだ」

といって伊勢崎はビデオデッキにビデオテープを入れ再生した。テレビに映し出されたのは、銃を構え店員を脅している俺だった。銀行の時と同様に、変装は一切していない。店員は怯えながら、レジのお金を鞆に詰め込んでいる。店員が詰め終わると、彼は銃の引き金を引き、店員の頭を撃ちぬいた。そして、店を出る間に、客を一人撃つていった。

ビデオテープを見て、俺の違和感は拭い去られた。足りなかったものの正体がつかめたのだ。そして、今まで起きていた不可解な出来事も全てわかった。あとは、もう一人の俺をどう捕まえるかが問題だ。

「なにかわかったことでもあったかね」

真剣にビデオを見ている俺に、伊勢崎が訊いた。

「ええ。もうビデオを止めていただいても結構です」

伊勢崎はビデオを停止させ、俺に顔を向けた。そして、口を開いた。

「このビデオから一体なにがわかったんだ」

「もう一人の俺の正体ですよ」

「なんだって！ それは本当か？」

伊勢崎は目を剥いた。

「はい。しかし、もう一人の俺を捕まえることは不可能でしょうね」「どういうことかね？」

「部屋を明るくしてもらえますか」

伊勢崎は照明のスイッチを押した。薄暗かった取調室は、ぱっと明るくなった。俺は立ち上がった。

「俺を見てください。影が無いでしょ」

「どうして……」

伊勢崎は驚きながら、ぽかんと口を開けていた。もう一人の人間が存在するだけでも不思議だというのに、人間に影がないということまで目の当たりにしたら、驚きも隠せないだろう。

「そう、もう一人の俺の正体は、俺の影だったんですよ」

「そんなことが有り得るのか」

俺はため息をついた。

「今更そんなこといわないでくださいよ。これだけ不可解なことが起こっているんですから、不思議でもないでしょう」

「それじゃ、犯人の足取りがつかめなかったのは……」

「おそらく、周りの影と同化したんでしょね。影の中を移動することができるんじゃないでしょうか。銀行強盗のほうのビデオも確認してみてください。犯人には影がないと思います」

「ああ、わかった。だが、これじゃ犯人を取り押さえることは無理だな」

伊勢崎は考え込んだ。

俺は今までに起こった不可解な出来事を思い出してみた。あの夢を見た次の日から、事件は起きていたのだ。全ては、俺の影の一人歩きが原因だった。ゲームセンターで母が見た俺も、麻衣から告白を受けた俺も、隼人が見た俺も、全て俺の影だったのだ。不可解な出来事が、全て日中に起こっていたのは、夜は影ができないからだ。陽がないと、影は行動することができなかったのだ。

影の一人歩きを食い止める方法が、一つだけあるかもしれない。影と本体は一心同体だ。俺が自分の影に触れれば、俺の影は戻るのではないだろうか？ しかし、そうするには、やつが俺の目の前に現れなければならない。

伊勢崎に連れられ取調室を出ると、俺は釈放されることとなった。警察署の入り口付近で、麻衣が椅子に座って待っていた。俺は彼女の許へと駆け寄った。

「どうしてここに？」

座っている麻衣に尋ねた。彼女はなににも答えず、俺に抱きついてきた。俺は優しく彼女を抱きしめた。

「伊勢崎さんが教えてくれたの。今日、大輝が釈放されるって」

俺は後ろに立っている伊勢崎のほうに首を捻って彼を見た。伊勢崎は、笑顔だった。そんな彼に向かって、俺は軽く頭を下げた。

「大輝のバカ。心配だったんだから」

麻衣の声は涙声だった。

「それじゃ帰るか。なにか奢るよ。心配かけたからな」

麻衣は顔をあげると、微笑んだ。彼女の目には涙が含まれていた。俺はそっと彼女に口付けした。

警察署を後にした俺たちは、小さな喫茶店に入った。ほんのりとコーヒーの香りが漂う店内にはカウンター席に男が一人と、奥のテーブル席に若いカップルがいるだけだった。俺と麻衣は、窓側の席に着いた。俺はコーヒーを注文し、彼女はコーヒーとサンドイッチを注文した。少ししてから、ウェイトレスがカップを二つとサンドイッチを運んできた。

「なんだか顔色悪そうだけど大丈夫？　だいぶ疲れてるんじゃない」

麻衣は心配そうに訊いた。

「そりゃ……二週間以上、牢屋にぶち込まれていたんだからな。あんなところ、二度と入りたくないね」

麻衣は、ふふふと笑った。

「笑い事じゃないって。麻衣も入ってみたらどうだ。罪を犯せば経験できることだぜ」

「私はそんな罪を犯すような人間じゃありません。一生縁のないところね」

麻衣は周りを一瞥すると、

「大輝が釈放されたってことは、真犯人が捕まったってことなの？　と声のトーンを落として訊いた。どうやら、彼女は本当のことを知らないようだ。俺は話そうかどうか迷った。

「いや、捕まってるじゃないよ。けど、俺の疑いが晴れたってことだ」

本当のことは話さず、彼女を誤魔化すことにした。これ以上、彼女に心配をかけることはできない。俺の問題に巻き込むわけにはいかない。

「そっか。でもよかった。大輝が釈放されて」

麻衣はそういうと、コーヒーを啜った。視線を窓の外に向け、ほっとしたような顔をしている。

「ねえ……さつきから私たちつけられてない？」

麻衣は俺のほうに顔を近づけると、小さな声でいった。

「つけられてるって誰に？」

「ほらあそこの人。新聞読んてるようにも見えるんだけど、さつきからずっとついて来てるよ」

麻衣は窓の外を指さした。俺はその指先を辿った。帽子を深く被り、新聞を読んでいる男が立っていた。その男は俺の視線に気づくと、口をぱくぱくと動かした。誤魔化せ、といったように思えた。

「気のせいだろ。気にすること無いって」

「そうかな、でもずっとつけてきてるんだよ」

「たまたま、同じ道だっただけなんじゃないかな」

麻衣は依然として訝しげな目で男を見ていたが、それ以上なにもいわなかった。

俺が釈放されてからというものの、事件に進展の様子はない。それに、今まで起こっていた不可解な出来事もぱたりと止んだ。嵐の前の静けさのようで、気味が悪い。次に、影の俺はどういったことを仕掛けてくるのだろうか。やつは未だに正体を現さない。

ぼつと、窓の外を眺めていると、携帯にメールが届いたことを告げる着信音が鳴った。メールは麻衣からだった。内容は、午後には映画を見に行く時の、待ち合わせ場所についてだった。待ち合わせ場所は駅とのことだった。

昼食を家ですべてから、俺は駅に向かった。約束の時間を五分ほど過ぎて駅に着いた。

「遅いつて」

後ろから背中を突かれ、俺は振り返った。

「悪い」

「ほら、切符買っておいであげたから」

麻衣は俺に切符を渡した。

俺たちは改札口を抜け、三番ホームに向かった。麻衣に聞いたところ、映画館は三駅ほど離れたところにあるらしい。

ホームの階段を駆け下りると同時に、電車は発車していた。

「もう、乗れなかったじゃない。大輝が遅刻するから」

麻衣はため息混じりにいった。そして、ホームの椅子に座った。

時刻表を見ると、次の電車は三十分後だった。俺がそのことを告げると、麻衣は露骨に残念そうな顔をした。

「それじゃ、映画に間に合わないじゃない。次の上映時間は三時間後だよ」

俺は腕時計に目を落とした。今から、三時間後だと次の上映時間は四時になる。

「まあ、いいじゃん。ゆっくりしようぜ。時間はあるんだしさ。そ



れまでどつかで時間潰してればいいだろ」

麻衣は長いため息を漏らした。俺は自動販売機で、二本の飲料を買うと、一本を麻衣に渡した。彼女は、ありがとうといってそれを受け取った。

カランと空き缶の甲高い音が聞こえ、俺は隣の麻衣の顔を見た。彼女が空き缶を落としたようだった。彼女はどこか一点をとらえ、なにかに怯えていた。

「どうしたんだ？」

「なんで……あれ、大輝じゃない？」

麻衣の声は震えていた。彼女は反対のホームを指さしていった。俺は彼女の指さすほうへと視線を移した。

そこには、不気味な笑みを浮かべながら俺たちを見つめている、俺の姿があった。ワンピース入りのティーシャツにジーンズを穿いている。二つとも以前に突然なくなったものだ。俺の心臓は高鳴っている。もう一人の俺が、とうとう姿を見せたのだ。

反対側のホームで、特急列車が通過するというアナウンスが流れた。彼は俺たちを見つめたまま、ぴくりとも動かない。

間も無く、特急列車がやってきて、反対側のホームを通過すると彼の姿はなかった。だが、彼は俺たちの目の前に立っていた。反対側のホームから、一瞬にしてこちらのホームにやってきたのだ。俺たちの同じホームにいる人たちは、皆一様に驚いた顔をしている。

俺は立ち上がり、彼のほうに歩み寄った。麻衣も立ち上がったが、臆した様子で足を踏み出そうとはしなかった。

「どうもはじめまして、といったほうがいいのかな」

彼は不適な笑みを浮かべながらいった。

「いや、はじめましてではないだろう。俺たちは二度会っているんだからな。そして今日が三度目の再会だ」

彼はぱちぱちと手を叩いた。小馬鹿にしたようなその態度に、俺は少し腹が立った。

「おやおや、あの鈍感な俺とは思えないね。そう、俺たちが今日会

うので三回目だ。もう俺の正体はわかってるんだろ」

「お前は俺の影だろ。今までの不可解な出来事は、全部お前の仕業だ」

「お見事」

彼はもう一度、手を叩きながらいった。

俺は彼に手を伸ばそうとした。しかし、あと少しで触れられるところになって、彼は消えた。俺は空を仰いだ。ちょうど、雲によって太陽が遮られたところだった。

「おっと、危ない。あんたに触れられるわけにはいかないんだよ」

俺の背後で、彼の声がした。あわてて俺は振り返った。彼は麻衣の隣に立っていた。

「どうして触れられたら困るんだ？」

「影と本体は一心同体だ。あんたに触れられたら、俺はあんたの影に戻されるからな」

やはり俺の読み通りだった。彼に触れることさえできれば、俺の影に戻るのだ。

「久しぶりだね。麻衣の告白を受けたのは俺だよ」

彼は麻衣に向かって笑顔でいった。麻衣はなにもいわず、怯えた表情を浮かべているだけだった。

俺は、彼のほうに足を踏み出した。

「それ以上近づくなよ」

彼は、バタフライナイフを取り出すとそれを麻衣に突きつけた。

麻衣は逃げ出そうとしたが、彼に腕をつかまれ首にナイフを突きつけられる形となった。

「それ以上近づくと、この女を殺すぞ」

彼はぺろりと舌を出すと、不気味に笑った。

「大輝……助けて」

麻衣は泣きながらいった。恐怖のあまり、彼女の身体は小刻みに震えている。

「お前はもう俺に手出しできないぜ」

「それはどうかな。お前、リバーシってゲームを知ってるか？」

「なんだそれは？」

彼は問い返した。

「逆転ゲームだ。一見、優勢だったほうが、後半で逆転されることもあるゲーム。オセロのようなもんさ」

「それがどうした」

「この状況、どう見てもお前のほうが優勢だ。それをひっくり返してやろうってんだよ」

彼は大笑いした。

「この状況をどうやってひっくり返すってんだ。見ものだね。やれるならやってみるよ」

「いわれなくてもやってやるさ」

俺は、周りを見回すと、数人の人物に目で合図を送った。そして、俺は自分の右腕に、勢いよく噛み付いた。

「いってえ」

彼は、苦痛に顔を歪め、ナイフを落とした。その瞬間を見逃さず、麻衣は彼の手を振り払い俺のほうに駆け寄ってきた。それと同時に、俺が目で合図を送った人間が、彼の周りを取り囲んだ。取り囲んだ中の一人の男が、彼の落としたナイフを線路のほうへ蹴り落とした。「どうだ、これで形勢逆転だな」

彼はちつと舌打ちした。俺の右腕からは、血が滴り落ちていた。

右腕がじんじんと痛む。もう少し加減しておけばよかった、と後悔した。

「お前らなんなんだよ？」

彼は、彼の周りを取り囲んでいる人間に向かっていった。そのうちの一人が警察手帳を出し、警察であることを示した。

「なんで、警察の人がここにいるの？」

麻衣は呟くようにいった。

「ごめんな、黙っていて。俺は記憶を無くしたんじゃないんだ。刑務所にいるときに、そいつの存在に気づいた」

麻衣は改めて、もう一人の俺を見た。未だに信じられないという顔をしている。

「そいつを捕まえるために、警察の方に協力してもらったのさ」

「そういうことなんだ。君のいうとおり、君を見張っていて正解だったよ」

彼を取り囲んでいる中の一人の男がこちらを向いていった。その男は、変装に使っていた帽子をとり、サングラスを外した。

「伊勢崎さん」

麻衣は、驚いた表情で、伊勢崎の顔を見た。

「じゃ前に私たちをつけていたのは、警察の人だったの？」

「そう、麻衣が不審に思っていた人は伊勢崎さんだったんだよ」

麻衣はむっとした表情で、伊勢崎を睨んだ。伊勢崎は彼女の顔を見て、ごめんと謝った。

「終わりだな。お前の負けだ」

俺がいい終わると同時に、四番線の特急列車が通過するというアナウンスが流れた。

「俺の負けじゃない」

彼は、きつと俺を睨みつけた。追い詰められているというのに、その目には余裕が感じられた。

「この期に及んで、勝てるでも思ってるのか？　俺がお前に触れた瞬間、お前は俺の影に戻るんだからな」

彼はふつと笑みを漏らした。

「勝てるとは思わないさ。だけど、この勝負、引き分けにはできる」  
彼は、一歩二歩と後退していった。

「なにをするつもりだ？」

俺の問いかけに、彼はただ笑っているだけで、なにも答えなかった。すると、遠くから特急列車が迫ってきているのが俺の目に飛び込んだ。やばいと思い、俺が彼に飛び掛った時には、彼は後方にジャンプしていた。

「あばよ」

彼が特急列車に跳ねられると同時に、俺の身体に強い衝撃が走った。俺の身体は宙を舞い、身体のうちこちは引きちぎられ、頭からは頭蓋骨が割れるような鈍い音がした。一瞬の出来事で、痛みさえも感じない。

目の回る世界に飛び込んできたのは、麻衣の泣き顔に彼女の悲鳴だった。数秒後、俺の意識は、深い暗闇の中だった。もう光の世界には戻れない、深い暗闇の中。あいつと最初出会った時の暗闇を思い出し、俺の意識はなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7592c/>

---

分身

2010年10月8日22時25分発行